
魔法先生ネギま！ - フィン人の国から -

くぬぎ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま！ -フィン人の国から-

【Nコード】

N9935W

【作者名】

くぬぎ

【あらすじ】

突如命を失った主人公！だが宇宙の意思？により新たな人生を半ば強引に歩むこととなった！エイラ（ストライクウィッチーズ）の体！謎の力！舞台はネギま！明日はどこだ！もう駄目だ！（注）これは作者の妄想の産物です。

TSで転生で憑依でもはや言葉もありません。

駄目だと判断された方はただちに避難してください！

プロローグ（前書き）

初投稿でこの有様です。

少しでも気分が悪くなられた方はすぐに戻られて下さい。

駄文にも程がありますが、どうぞよろしく願います。

プロローグ

気が付けば何とも言えない空間の中にいた。

夜空を思わせるような暗い世界に星のようにキラキラと小さな光が見える。

綺麗だなと思うが、今はふけっている場合ではない。

自分の状態だ。

視界ははつきりしているのに、自分の姿を捉えられない。

手足の感覚もあるので目の前に手を持って来た、筈なのだが目にそれは映らない。

胴体も見当たらないが、確かにここにある感覚はある。

透明人間ってこんな感じだろうか。

五体は有るが体が見えない、何とも言えない空間で何とも言えない状況だ。

そもそも何でこんな状況になっているのか。

こうなる前の行動を考える。

朝起きて、今日は仕事休みだから都内に出ようとして準備して家を出……。

「……！」

思い出した。

家を出た瞬間に立ちくらみを感じたと思ったらそれっきり意識がなくなっただ。

それで気付いたらこうなっていたんだ。

夢にしては良く出来過ぎている。

ここまで意識がはつきりしている夢は無い。

夢だと分かる夢、確か明晰夢とか言っただけ……と思いたい。

夢なら覚める、起きる俺、今すぐに。

ここを居心地悪いとは言わないが、ふわふわと浮いた感覚は落ち着かない。

何故なら俺は高所恐怖症だから。

地面らしき場所も見当たらないのはいただけない。

人間は大地に足を付けて生きるべきと思っています。

起きる俺、ウェイクアップ俺、レッツゴー！、グッモーニン！！

俺は見えない手足をばたばたと動かすようにして何とか覚醒を試みる。

すると星のように煌めいていた光の一つが輝き、吸い寄せられるように

近寄って来た。

うお、まぶしつ。

間近で見る光はとんでもなく眩しい。

手で目を覆うとしても手は透明で眩しさを通してしまうので薄目で光を見るしかない。

「・・・眩しいんだが」

独り言的につぶやいてみる。

「すまない、これでいいかな」

そう言つて光は俺に眩しくない程度まで輝きを落としました。

おお、これで眩しくない。

て、おい待てい。

自分にツツコミを入れる。

コミュニケーション可能ならするしかないだろう。

「話せるんでしょうか？」

取りあえず敬語だ、正体不明の相手にはとりあえず下手に出よう。

「言葉は通じているね」

「はい」

さてこの光は一体何なのか？

俺に何かするのかな。

「単刀直入に伝えよう」

「はい」

「君は死んだ」

「おい」

会話とは言葉のキャッチボール。

なのにこいついきなりどストレートの剛速球を投げて来やがった。だがそれ以上に初対面に対してお前は死にましたとは何事か、罰として敬語は中止だこの野郎。

野郎かどうかわからないけど、若い男の声だし。

「いきなり死んだって、本気で言ってるの？」

もう遠慮はいらないのでこちらはタメ口だ。

「本当のことだよ、嘘は言ってるない」

わーい、何様だこいつは。

誰が信じるかそんなこと。

「俺が死んだっていう証拠は？」

まずは証拠を示せ、話はそれからだ。

「そうだね、君には直接見せた方が話が早いだろう」
すると目の前に円形の穴が空いた。

その中に星空ではない景色が映し出される。

「これは……うちの家の墓じゃねーか！」

何を見せるのかと思えば見間違っはすもない、今に至るまでの二十五年間、掃除やお盆のお迎えで散々訪れたところだ、間違っ訳が無い。

「だが墓を見せたところで俺が死んだという証明にはならないぞ……？」

これが証拠だとかぬかすなら徹底口論開始だ。

「……」

光は答えず。

まだ何かこの墓の画像に何かあるのか？

そう思って再び映されたのは墓石の脇の石碑。

ここには亡くなってこの墓に眠っている人々の名前が刻まれている。その中に、俺の名前があった。

戒名と共に刻まれている。

新しい彫り跡。

ここ最近に加わった物に違いない。

「っ……!!!!」

イタズラにしては度が過ぎる。

絶句していると再び画面が切り替わる。

今度は家だと!?

紛れもない我が家だ。

また画面が切り替わり家の和室へ、そこにあるのは……。

「まさかっ!」

「君の考えている通りだよ」

咄嗟に出た俺の叫びに光が答える。

和室にある物、それは仏壇。

その中で果物と一緒に飾られている一枚の写真。

無い筈の鼓動が速くなるのを感じる。

頭の奥底でこれを見てはいけないと声がする。

だが俺は目を反らせなかった。

写真の中に映る、笑っている俺の姿を。

「っ!……あくっ……っは!」

うまく言葉が出ない。

何を言えばいいのか分からないのだ。

一つ分かる事は内の家族は決してこんな事をしないとということ。

母の実家が寺の関係ということもあってこういった仏前に対して、

いたずらのような真似は決して無いことだと断言できる。

「……これは事実なのか? 夢でも幻でもなく」

「事実だよ」

淡々と言いきる光。

嘘をつけ、この映像もお前が作ったんだろつと吐き捨てるどころだが、その声には俺は嘘偽り等微塵も感じられなかった。

いくらこいつの言うことは嘘だ、と自分に言い聞かせようとしてもそれが出来無いのだ。

感情が高ぶって正常な判断が出来なくなっているのかもしれないが、何故かこいつの言っていることに間違いが無いとしか思えないのだ。

しばらく俺は黙り込んでいた。

ぐちゃぐちゃになった頭を整理するために。

「落ち着いたかい？」

俺が混乱から戻るのを待っていたように光が話しかけてくる。

「今は。でもこれが夢だと願いたい」

「私も夢としてあげられたらと思うが、残念ながら期待には添えられない」

「・・・あなたは神様かい？」

とりあえず思ったことを口にする。

ここが宇宙のような世界で無く、俺も体があつたら性質の悪い冗談だで済ませるが、

まず人間のやることには思えなかった。。

「いや、神というのは人間が考えた呼称に過ぎない。

私は宇宙が生まれた時に一緒に生まれた存在だ」

宇宙と一緒に？

スケールの大きな話だ。

「その宇宙・・・生まれが死んだ俺に何の用？」

「・・・私はこの宇宙が好きだ」

質問に答えていない。

「そしてそこに発生した全ての命が大好きだ」

一人語りを始めてしまった。

「だから私はその中で理不尽に消えてしまった命を救っているんだ」

「なんだそれ？」

「自業自得や寿命で終わってしまった命は仕方がない。

だがそれ以外で終わってしまう命を私は悲しいと思っている」

言いたいことが良く分からないが、命を奪ったものは逆に命を奪わ

れても仕方がない、年をとって死んでいくのもしょうがない。

それとは別の・・・事件や事故に巻き込まれたりした死や病死の命は可哀そうですってことか？

「君の考えている通りだよ」

口に出さなかったのに俺の考えを読みやがった。

こちら心を読めるなら会話など最初から必要無かっただろうに。

ということはさっき俺が取り乱していた時も恐らく読んでたろうな。くそ、腹が立つ。

「ちなみに君は、君達の世界で言う心臓の病で死んだ」

そうなのか。

何だろ、心筋梗塞とか心臓疾患とかか？

たまに心臓が痛いかなと思う時はあったがあれが予兆だったということか。

早く病院に行くべきだったかな。

「つまりは自分で他所の死にざまに線引きをして可哀そうだと思うものに」

こうやって語りかけるのがお前の趣味か」

「その通り。そしてそんな命達に次の生き方を与えるのが

私の生きがいだ」

「それはつまり転生させるってことか？出来るのかそんな事が」

「その通り。記憶は引き継がせ、そして次にどう生まれるかは私が決め　る。それから全て自由だ。私は決して介入しない。それだけは私が昔　から、これからも変えないことだ」

昔、ということとは俺のような目にあつた先人達が数え切れないほどいるのか。

多分な力を持つ輩は碌でもないのが多いな本当に。

勝手に今までは別の生き方に放り出して頑張れか、俺に体があれば今すぐ殴りかかったかもしれない。

望みもしない生き方を押しつけられることがどれ程苦痛か。

人間に生まれた者がもし次にミジンコになったらどんなに嘆くこと

か。

そんな事を想像してみないのか？

そんなことも考えずにこうなれと押し付ける気か？

「それは大丈夫だ。転生は違和感を与えないものになっている」

・・・そこまで外道では無かったか。

「つまり人間は・・・人間に転生させるんだな？」

それならライフスタイルにそこまで影響を及ぼさないだろう、多分。

「その通り。だが、どんな人間かは私が決める」

私に決定権があります、と、果てしなく嫌な予感がする。

出来ればお断りしたい。

「・・・転生させるなんて芸当が出来るなら俺を生き返らせること

だって 可能なんじゃないか？」

「それは無理だ。生き返る、つまり時間を巻き戻すようなことは私

は出来ない。

出来ないからこそあくまで次に繋げてあげることしか出来ないん

だ」

「ならせめて記憶を消せ。別の人生なのに以前の記憶を持っていた

ら混乱 するだろうが」

「それも出来ない。私の力は死んだ命に力を持たせ再び次に回すだ

けなん だ」

あっさりと密かな望みは砕かれた。

生き返ることは出来ない。

なのに、今までの記憶を背負って新しい人生を生きていけ。

俺と両親と姉、四人で過ごしてきた二十五年間の記憶を持って。

無理だ。

間違いなく混乱する。

「待て、やっぱり納得・・・っ!？」

光に詰め寄ろうとした瞬間、足元に突然穴が空いたように俺の身体

が落下を始めた。

何なんだ急にこれは！

光はどんどん遠ざかっていく、だが俺の耳には間近で聞いたかのようにはつきりと聞こえた。

「すまないが時間が来てしまった。私はまた次の命を

迎えないければならない」

何だと！どこまでも勝手な奴め！

「だが安心して欲しい。生前に君が持っていた様々な情報から君を転生させる。

もちろん生き抜く力も持たせる。そしてそれをどう使うかは君次第だ。

それじゃあ、頑張ってくれ」

奴の声はそのまま聞こえなくなつた。

真つ暗な世界を落ち続ける俺。

その間にもどんどん落下速度が上がっていく。

くそつ、くそつ、ふざけんな。

何が何だかもうさつぱりだ。

ついていけねえよ！

やっぱり夢だ！これは夢なんだ！

スピードに意識が飛ばされそうだ。

夢なら覚めろつ！

俺は力の限り叫んだ

「う……あああああああああ……!!」

「……あああああああ……!!」

カツと目を見開いて体を思いつきり動かす。

勢いそのまま俺はバランスを崩し堅い何かにしこたま頭を打ちつけた。

「っ……痛った……」

あの高さと速度で落ちたにしては随分衝撃が温いような。後から体も落ちてドスンと音がする。

一緒に布団が顔の上に落ちてきた。

「何なんだよ……」

布団を除けてをむっくりと体を起こして窓を見る、そこには綺麗なお月様の姿。

「夢でも見てたのかって……そうだよなあ！」

あんな出来事夢に決まってる。

やれやれひどい夢だったと頭をぼりぼりと搔いて。

俺は違和感を感じた。

こんなに髪は長かったかな俺？

腰ぐらいまでの髪、月明かりに照らされたそれはしかも灰色……

いや銀髪？

引っ張ってみたが痛い。

ツラの類ではないようだ。

というか、髪を引っ張った手や腕をはじめ体が変わだ。

妙に小さいというか、身長も低いようだ。

天井が高く感じる。

身につけている物も疑問だ、白いワンピースのような感じだがさらさらとさわり心地が良い。

だが俺はこんな恰好で寝た覚えはない。

ランニングとトランクスの筈。

なのだが下半身には白いパンツ。少し大きめのように感じるが良くフィットしていると思う。

そして問題がある、パンツの中にある筈の性別、男にはあるはずのアレの存在を感じられない。

体の異常はかと思いいパンツをずらした俺は一瞬思考が停止した。

無いのだ、アレが。

そしてそこには性別、女にあるはずの物が。

胸に手を置いてみる。

あるのか無いのか分からない、ということとは子供……？

情報を総合すると俺はおそらく銀髪でストリートヘアの幼女だ。

やったね俺、将来有望かもよ。

……って黙れ俺。

そんなわけが無いだろう。

だがさらに俺を追い詰める出来事がある。

今自分がいるここ、俺の部屋は各所に同人誌が積まれたカオスタワーがあつたはずだが、それがどこにもない。

フィギュアやモデルガンもところせましと置かれていたはずなのがそれも無い。

というか酷く殺風景だ。

月明かりを頼りに見渡すと子供用？の小さなベッドに木製と思わしきクローゼット、さらに木製の小さな机とイス、子供部屋なのだろうか。

というか誰の部屋ですか。

まさか俺の部屋？

なわけないよなあ。

まだ夢の中か、参ったねこれは寝直そう。

幼女になつた貴重な一時だった。

やれやれとベッドに戻ろうとすると、紙切れが一つ乗っていた。

「？」

何かの字が書かれているらしい紙をとって見てみる。

そして俺はまた思考が停止した。

「親愛なる君へ

君の転生先の世界は「魔法先生ネギま！」の世界です。

場所はフィンランド。

言語については日本語、フィンランド語、両方ペラペラに話せる

ように しておいたよ。

そして君の姿は「ストライクウィッチーズ」の

「エイラ・イルマタル・ユートイライネン」にしました。
名前も「エイラ・イルマタル・ユートイライネン」。

と言ってもストライカーは無い。

だが、ネウロイは出ないから安心してほしい。

あくまで「魔法先生ネギま！」の世界だ。

そして力は予知とタロットカードを駆使した魔法。

詳しくはおいおい覚えていくといい。

君の第二の人生が幸せであるように。

それじゃあ頑張って」

頭痛がする。

夢じゃないのかよ。

しかもこの設定は何だよ。

ところどころアバウト過ぎるだろ。

そんな事を考えていると部屋の扉の向こうからドタドタと音がする。

誰か来た、と思う前に扉が開く。

そこには大人の女性が一人と大人の男性が一人。

どう見ても日本人ではない。

二人とも顔立ちも整っていて美形だなと思った。

だがこのシチュ、まさか……。

「エイラ！」

大人の女性が走り寄り俺を抱き締める。

「良かった……！目を覚ましたのね！」

その声は涙声だった。

大人の男性はぶるぶると体を震わせゆっくりと近づき。

女性と一緒に俺を抱き締める。

「エイラあ……本当に……本当に良かった……！」

力が強いです。若干苦しい。

つまり。

俺がエイラってことはつまりこちらの二人は・・・両親・・・のかな？

玄関先で意識を失い、変な光にお前は死んだ宣言をされて、生まれ変わらせるから頑張れと言われ、もう前の人生には戻れなくて、気付いたら幼女で、しかもエイラで、ここはネギまの世界です、と。あと両親の言葉は明らかに日本語では無かった、英語とも違うようだし。

だが俺には話している単語一つ一つもはっきりと意味がわかる。

そう、今まで話してきた日本語のように。

そして、確かに人間になったけど。

アニメとか漫画ベースとか、ねーだろ普通に。

・・・

・・・

・・・

もう駄目だ。

俺の頭の情報を処理する限界を超えた。

俺は二人に抱きしめられたまま気を失ってしまった。

意識が飛ぶ寸前にぐたりとした俺に二人がまた叫ぶのが聞こえたよ
うな、気がした。

プロローグ（後書き）

いかがでしたでしょうか。

この有様からエイラ（オリ主）の波乱万丈な物語が始まります。

すぐにお逃げ下さい。

・・・もし、まだ余裕だという剛の方は次もよろしければ読んでやって下さい。

新しい世界でこれからを（前書き）

続いてしまった！何ということか！

・・・はい。転生したオリ主諦めムード。

そこにやってくる罪悪感ムード。

そこに（呼んでもいないのに）やってくるあの変な奴！

エイラ（オリ主）の未来は何処へ行く！

・・・どうぞ。

新しい世界でこれからを

閉じていても感じる眩しさに観念して瞼を開く。

窓からは明るい光が入ってきていて、どうやら日中だということが分かる。

むくりと起き上がり自分や周囲の様子を確認。

・・・

昨夜？と変化は無いようで、もはや夢ではなくこれが現実なのだと受け入れるしかない。

「・・・はあ」

覚悟を決めるしかないか。

俺はため息交じりに頭をぼりぼりとかく。

その時に手に握ったままになっていた紙がぼろりと落ちたので、改めて読もうかと思ったら、字が消えていた。

一度読んだら消えるとか不親切にも程がある。

一回ですべて頭に叩き込めということなのだろうか、ならば注意書きをしておいてほしい。

いかん、思いだせるか俺。

一休さんのように頭に指を置いて記憶の再生にかかろうとした。

「ん？」

そこで大きな変化があることに気付いた。

俺を挟むようにして、昨夜の男女が一緒に寝ているのだ。

「川」の字で寝ているというやつである。

部屋は子供部屋で間違いは無い、何故ここで寝ているのか分からないが。

というか子供用ベッドで俺を真ん中にしていたようだから二人は両端にいて寝返りをするば間違いなく落ちる。

いや、身じろぎ一つでもすれば落ちるだろう。

何でそこまでギリギリに寝るんだ。

二人の様子を見ていたら俺は自分の下腹部の違和感に気がついた。

朝起きたら大体の人は向かうだろう。

生理現象、つまりトイレ（小）である。

その衝動は男だった時よりも大きい。

そういえば女子は男子よりもトイレが近いと聞いたことがある。

あの頃はふーん、そうなのか程度に思っていたが自分が体験することになるうとは！

布団の上でいたして世界地図を作るわけにはいかない。

俺はもぞもぞと布団の上を移動しベッドから降りた。

筈だった。

「危ないっ！」

ベッドから降りて床に足を着けようとした瞬間に、俺は背後から抱きかかえられてしまった。

首を後ろに回せば二人の姿。

「エイラ、大丈夫！？」

本気で心配してくれているようです。

「だ、大丈夫だよ・・・」

うん、嘘はついてません。

大丈夫です。

「怪我は無いかい！？何処か痛いところとか！」

平気です。

「具合が悪いとかはない!?!」

あえて言わせてもらえば、膀胱がそろそろヤバいです!

もじもじと体を動かしてはみるがどうやら伝わる様子はない。

「何でも言っつてエイラ!」

「何でも言っつてくれエイラ!」

分かった、いろいろ言いたい事はあるがとにかく今は、

「・・・」

「!?!?!」

言わせてくれ!

「トイレ」

「!?!」

・・・何とか世界地図製作の危機は去った。

だが終わった時にはどっと疲れていた。

一緒に入ろうとする二人を何とか阻止し用は足したが、慣れた体で

はないので中で

便座から落ちかける等悪戦苦闘していたら、戸の向こうからまた何かあったかの今
開けるだのと聞こえて止めるのが大変だった。

放っておいたら戸を破壊して入って来かねないのである。

頼むからやめて下さい。

トイレから出て二人はどうにも離れてくれない。

部屋に戻って見たがとところでどうしようも無かったので二階の子供部屋から一階のリビングへと移動する。

階段を下りようとしたら危ないからと男性に抱っこされて降りた。

おんぶ、これが子供なら視界が高くなって嬉しかったりするだろうが、残念ながら中身は一応成人している男。

嬉しいというより恥ずかしい。

リビングにて壁やら天井やら色々で見回して、洋風、まあ北欧だから当然洋風かなとか思いながらソファに座っているのだが、その間も二人は左右からじつと俺を見つめている。

左右から常に監視、監視されている容疑者のようだ。

とはいえここまでべったりくっついていてというのは家族のスキンシップにしてはちょっと大袈裟だ。

何か理由があるのだろうか。

・・・そういえば俺が目覚めた瞬間、大丈夫かと聞いてきたっけ。

つまりは俺ではなく、この体。

俺の意識が入る前の体に以前何かあったのだろう。

何があったのか気になる。

もしかしたら答えてくれないようなタブー的な事があったかもしれないが、事態の進展を図るには行動あるのみである。

俺は意を決して二人に話し掛ける事にした。

「お、・・・私、今までどうしてたの？」

危なく俺と言うところだった。

以前の口調もさっぱりだが恐らく俺、は多分無いと思う。

男勝りだったら・・・その時はその時で考える事にしよう。

すると二人はお互い顔を不安げに見合わせたゆっくりと後に答えてくれた。

俺、正確にはエイラは半年近く眠り続けていたことを。

家の前の階段に腰掛けて俺はぼんやりとしていた。

「少し外に出たい」

俺はそう言っただけで家から出た。

俺の様子を察してくれたのか、二人はついてくることは無かった。

ある日突然倒れ、そのまま今日までずっと目を覚まさなかったというこころらしい。

脈はあり、呼吸もあって傍から見れば単に寝ているだけのようだったようだ。

原因は分からず、医者もお手上げ状態。

それでもいつかきつと目を覚ますと二人は寝たままの娘の世話を続けていたということだった。

それだけ娘のことを心配していたのだ。

そうすると俺は申し訳なくなってくる。

意識を失う前のエイラ、つまり俺がエイラになる前の人格はどうな
ってしまっただのか。

俺が入ることによって消えてしまったのではないだろうか。

ならば俺がエイラを殺したも同然ではないだろうか。

・・・何が違和感無いようにする、だ。

胸がむかむかする。

最悪の気分だ、苛立ちがこみ上げてくる。

誰かの人生を犠牲にして、俺は生かされる気にはならない。

俺はうなだれて頭を抱えた。

「その心配はいらないよ」

「!」

聞き覚えのある声にはっと顔を上げる。

そこにはあの暗い宇宙で会った光がいた。

前にもう干渉はしない、いや、できないと言っていなかったか、こ
いつは。

「その心配は無いってどういことだ？」

「今は君にしか見えない、君にしか声も聞こえないようになって
いるから大丈夫」

「そんなことを聞いているんじゃない？」

「大丈夫だ。含めてそのままだよ、君が危惧するようなことは無い。
君として意識が覚醒する前のその体はただの入れ物、肉の塊に過
ぎない」

「どういことだ？肉の人形だと？」

「つまり、君の魂が入る前のその体は感情の無い人形のような物だ
ったのさ。」

考える事も感じる事も無い、心臓という機関が動き、ただ誰かに
言われたままに動くだけの、ね」

「・・・嘘じゃないか？」

「こんな嘘なんて誰も得をしないよ
それでも不安ならあの二人にでもどんな子だったか聞いてみると
いい」

後ろを振り返ってみれば心配そうにこっちを見ている二人の姿があ
った。

「そうか・・・それなら俺は」

「誰の命を奪ったわけじゃないよ」

殺していない、その言葉に俺は心底安堵した。

後ろに倒れ込み手を大の字に拡げる。

・・・そうだな聞きたい事が。

「お前前にもう干渉しないとか言ってなかったっけ・・・って」

起き上がった先にあいつの姿は無かった。

また家から出て来た時のように静まり返った世界。

行ってしまったかと思っただらどこからともなく声だけが聞こえてきた。

「私は次の命の幸せを願っている」

「だから君の悩みを解消させてあげたくて来たんだ。

私の力でも干渉は一回しか出来ないからこれで本当にお別れだけだね。」

ああ、君の元の家族も元気になっているよ。

それじゃあこれで、両親が心配しているから早く戻ってあげるといい」

言っただけ言っただけ声は聞こえなくなってしまった。

どこまでも勝手な奴である。

もう来れないとか言っていたが・・・また来そうな気がするが。

それにしてももう一つの不安、俺の家族はどうしているかというところともお見通しとは。

・・・

「家族にどうか幸せが訪れますように」

俺は青空を見上げて祈るように呟いた。

信じよう、信じるしかない。

立ち上がって深呼吸をして家の方を向く。

二人、いや、両親と目が合った。

俺を真直ぐ見つめる。

長い間待たせてしまったようだ、申し訳ない。

これから俺はエイラとして生きていく。

親と一緒に。

俺は二人に向けて言った。

「お父さん！お母さん！」

帰ってきたらまずは、

「ただいま！」

あ、笑ってくれた。

こっち来た。

父さん顔が涙でぐしゃぐしゃ。

母さん、鼻水出てる、美人が台無しです。

そして二人とも・・・苦しいから！

力一杯抱き締められて意識が落ちかけたのは言うまでもない。

夕食が今まで見たことも無い物ばかりだったがとても美味しかった。

とりわけ母さんの得意料理だという「ヤンソンさんの誘惑」は絶品だった。

でも二人とも・・・苦しいから！（食べすぎで）

おかわりは自分でしますから・・・ああ、待って待って、盛るのやめて下され母さん！

台所に行ってさらに料理を作ろうとしないでくだされ父さん！

デザートを食べながら、後日改めて目覚めたお祝いをしようということになった。

俺は思った。

身体もそうだが、胃袋が早く成長しますように、と。

新しい世界でこれからを（後書き）

終わった……。

はい！何も言わないでください！唐突ですね！分かります！

心理描写とかマジきついです！っーか無理です！

作者は逃げます！

・・・覚悟を決めたエイラ（オリ主）

そこに現れるストライクウィッチーズからの人物とは！

次回！はじめまして！これからよろしく！そしてお前丈夫だなあ！

初ともだち！ 前編（前書き）

未知との遭遇、いやニパとの遭遇です。

オリ主が作者の意向によりちよつと変態成分が入っています。

寒気を感じられたら直ちに避難を！

好きな音楽を聴いたりして精神の安定をはかられて下さい！

覚悟完了の方はそれではどうぞ。

初ともだち！ 前編

朝。

目を覚ました俺は朝ご飯を親と食べた後、家の中を散策した。

前（転生前）に世界の家的な本でフィンランドの項を読んだ時、白地の壁紙が多いな的な感想を持っていたが、直に見ると外からの日差しで白い壁が輝いているように見えて電気をつけていない室内でもとても明るかった。

かといってただ白いばかりではなく所々に木材を使っていて、木のぬくもりを感じる。

あちこち家を訪問する、見えないところで傷ついていた的な番組のテーマソングを口ずさみつつ俺は家を探検した。

そして何というか・・・家具は、カラフルな物が多いです。

おしゃれえ！

今度は家の裏手へ、するとそこには湖があった。

静かな湖面を水鳥が悠々と泳いでいる。

深さは分からないが広さは中々の物だ。

流石フィンランド、森と湖の国。

フィンランド語で自国のことをスオミと呼び、スオミには「湖の国」という意味があると言つ事を昨日の夜に母さんから聞いた。

俺にいろいろ一から教えてくれるのだ、ありがたくいろいろ聞いてこれからもありがたくいろいろ教わろう。

そこで俺はある目当ての物を探してみる。

フィンランド、湖、後は・・・見つけたぞ、サウナ！

木の傍にある小さめの小屋、湖にせり出した棧橋つき！

もはや疑う余地なし。

近寄つてまじまじと見ていると家の探検からずっとついて来ている父さんが話し掛けてきた。

「エイラ、サウナに入りたいのかい？」

「うん！」

その通りですとも！

せっかくフィンランドに生まれたからには入らなければ話にならないではないか！

「よし！入ろう」

何い！今！？

これは予想外である。

「準備をするから今夜に！」

ですよー！

流石に今すぐと言われたら驚きです。

こんなこともあるつかと準備しておきました的なノリでは無かったようだ。

「でもそのうち入ろうと思って大体用意は終わっているから、今すぐ火を入れなくても大丈夫だよ」

掃除とか終わってたんですか、それは上々！

でも例え汚れてるとかでも掃除手伝おうとか思ったけどね。

「まだ時間はあるよ……エイラ」

はい何でしょう？

父さんの顔を見上げる。

「二人つきりだね」

？

何ですと？

確かに母さんは買い物に出かけていて今は二人つきりですが。

「この時を待つてたんだ・・・母さんが一緒だとできなくてね」

あの、目が怖いんですが。

嫌な予感がするんですが。

思わず後ろに後ずさる。

それに合わせてゆっくりと近寄って来る父。

まさかとは思いますがその、あの、父と娘の背徳的な行為的な物をお考え？

だとしたらこちら、四歳児ですよ？

・・・

無理無理無理！まず物理的に入らないからって何を考えている俺！

何が入らないんだ俺！

そうじゃないぞ！

ごめんなさい、お父さんは恋愛対象には思えません！

NO！

いつまでも優しいパパでいてね、まる。

違う！作文か！

いかん、焦るな！

焦るとロクな事を思い浮かべないとはこつこつこつこつである。

まずは戦略的撤退を！

Q、どこへ？

A、どこかへ！

行動あるのみ、兵は神速を尊ぶのだ！

そして俺が身をひるがえしてとにかく逃げよう

「・・・お父さんとボール遊びしよう！」

して俺は盛大にコケた。

頭から。

慌てて助け起こしてくれたお父さんに俺は心の中で詫びた。

娘と二人で遊ぶのが望みだったんですね。

ごめんなさいあなたの娘がピンク脳で。

俺って・・・ほんとアフォ。

「行くよー、え　　い！」

「うわっ！強いぞ　　！すごいなエイラ！」

父さんと家の前でボール遊びです。

中身二十五歳ですが、めっさ楽しいです。

身体の都合、短い手足にこの力で片手投げはどうにもつまく投げられないので

両手で掴んでボールを勢いつけて投げているのだが、

「おっ！また真ん中だぞ！上手だなーエイラは！」

軽々とキャッチされる。

しかも思いつきりくらったように大げさに受け止める。

面白いけど、これは悔しい。

「それ行くぞー！……って、あ！？」

父さんが手を滑らせ、投げたボールが俺の頭を越え、生垣も超えて隣の家の庭に入ってしまった。

「ごめんごめん！取って来るよ！」

「大丈夫！」

父さんが向かおうとしたので俺が取りに行くと言って隣の家へ。

見たところ庭先には誰もいなかった。この隙に取らせていただくことにした。

「お邪魔しまーす」

万一家人に見つかってもボールを探しに來ましたと言えば分かって貰えるだろう。

多分。

この容姿なら行けるはず、子供のやることなのでどうにか許してください、マジ。

そして肝心のボールはどこに。

とりあえず目に見える範囲には見当たらない。

何かの影にでも入ってしまったのだろうか。

見落としがないか周りに視線を配りながら木の方へ近づくとボールが見つかった。

・・・正確にはボールが出てきた。

俺と同じ年ぐらいかと思わしき子供に持ってこられて。

「・・・」

俺に比べれば短かめの金髪。

青い目が綺麗ですね。

……んー男の子かな？

するとその子がボールを持ってこっちに近付いてきた。

おお、言うまでもなくこちらの意図を看破して動いてくれるとは。

「ありがとう！」

目の前に来たので礼を言ってボールを受け取ろうと手を出したが、その手にボールが帰って来ない。

それどころか周りをまわったり立ち止まってこっちを凝視したりとじろじろと見られている。

「……何？」

何がしたいのかわからないので尋ねてみると目の前に来て止まる。

「……いつる？」

はい？

今何とおっしゃいましたか少年。

イッル・・・って確かストウイ（ストライクウィッチーズ）でエイラが呼ばれている愛称だっけか。

「・・・いつる？」

何でこの子が俺をそう呼ぶかは知らないが、呼ばれたからには応じよう。

「うん」

するとその金髪少年は満面の笑顔を浮かべると、

「おかーさん！いつるがおきたー！」

そう言って家の中に突撃して行ってしまった。

・・・

しばし呆然とする。

・・・はあっ！？ボールは！

近場に見当たらないところを見ると少年が持ったまま家に入ってしまったようだ。

ぬうつ！人を呆気にしてその隙にボールを持ち去るとは何という策略！

ここは追うべきか迷っていると、

「エイラー！大丈夫かい！」

そこへお父さん登場。

心配して見に来てくれたようだ。

これは心強い。

「お父さんボールが・・・」

拉致されたでござる！助けて！

父さんにどうにかして貰おうと家の方を指差すと、その家からさっきの少年と共に

その子の両親らしき男女が現れた。

ぐ！こちらが親ならそつちも親か！

だがそのボールはウチのです！

正義は我らに有り！お父さんやっちゃって下さい！（説得で）と、俺は得意気になっていたのだがそうはいかなかった。

「ユーティライネンさん！エイラちゃん目を覚まされたんですか！」

「そうなんですよ！って、ああ！申し訳ありません！」

本来ならすぐに報告を兼ねてカタヤイネンさんに挨拶に伺おうと思っていたのですが・・・」

「いえいえそんな！長い間目を覚まさなかった娘が目覚めたなんてきつと私どもの方でも傍を離れませんよ！」

談笑開始である。

お隣さんで親交ありでしたか。

とどうかカタヤイネン？

すると・・・まさか・・・いや、恐らく間違いなく。

「ほらエイラ、ユーティライネンさんのとこのニツカちゃんだよ。

眠っていたから気付かなかったかもしれないけど、ほぼ毎日のようにお見舞いに

来てくれたんだよ」

やはりそうでしたあー！

ニツカ・エドワーディン・カタヤイネン！

つまりはニパ！

俺と同じく女の子ですね

・・・

ごめん、かわいい少年と思ってました。

この子がそのうちセーターの上からでも胸の大きさが分かるナイス

バディに

なるのだろうか、そう思うと胸が熱くなってくる。

そして・・・お見舞いありがとう！

それから父さんはカタさん、もといカタヤイネン夫妻とお庭にテールを出してきて
ブルを出してきて
て歓談を始めてしまった。

俺とニパも同席している。

主に互いの子の事を話しつつも、きつちりと自分の娘自慢もしている。

父さん、娘に悪い虫がついたら息の根を止めてあげますよとか言わんでください。

カタさん夫妻、それはもちろんですよ、私達もですよとか応じないで下さい。

親ヴァカ系か！恥ずかしいです！

だが、ニパは会話の内容は分かっているようである座っているのが飽きてきたのかあつちこつちをきよるきよるしている。

するとイスから降りると家の中に入っていった。

まあ子供のころはこんな感じだろう。

身体を動かしていたいのだ。

大人になればじっとしている機会が腐るほどある。

公共の場ならここでは静かにじっとするべきと注意したいがここは家だ。

自由にする権利がある。

というか四歳児にビシッとされたら俺が困るじゃないか！

歳相応に楽しもうぜ！？

そんなことを考えていたらニパが我が家のボールを持って現れた。

「いつる！あそぼ！」

俺の傍に来て満面の笑顔で誘ってくる。

俺は父さんの方を見ると、察してくれたようだ。

「遊んでおいで、あまり遠くに行っちゃ駄目だよ」

「うん！」

カタ夫妻も温かく見守ってくれている。

許可は下りた。

「よし！行くぞニパ！」

これより^{ほろろそひ}墓悪流亜迦火を開始する！

ついてこいニペア！

だが！そのボールはウチのだぞ！

俺とニパは裏手の湖の方へと駈け出した。

理由はあっちの方が庭先より広いのである。

・・・湖にニパが落ちないように気をつけよう。

走りながらニパが訪ねてくる。

「ねえいつる」

「何だー？」

「にばってわたしのこと？」

おっと今までそう呼ばれた事が無かったのか？

・・・どう釈明すべきか。

「んー・・・良く笑うからかな・・・にぱーって、ホラこんなふうに」

さっきのニパの笑顔を再現してみる。

「あはははは！へんなかおー！」

おう悪かったな、おう。

「でもうれしい！いつるはいつるでわたしはにぱー！
きょうからわたしにぱー！」

おうニパだよ、おう。

お気に召してくれたようで何よりである。

俺の第二の人生では初の友だ。

仲良くしようじゃないか。

・・・ところでイツルってのはイルマタルから取ってんのかな？

というかニパがいるなら他にもスオムス勢がいるんだろうか。

エルマ隊長、ニパ似のハンナ、アホネンとか。

いるなら会ってみたいな。

そんなことを考えていたら俺の顔面に我が家のボールが帰って来た

のだった。

・・・おかえりい！

そのあと買い物から母さんが帰り、カタ夫妻に挨拶したのち父さんが俺と二人で遊んだのが発覚して私もエイラと遊びたかったと父さんをずるいずるいとどつきまわしたそうなの。

俺がニパとボール遊びをする中に、大人四人がやってきてボール遊びに加わるのはそれから数分後のことであった。

初ともだち！ 前編（後書き）

子供のころの口調は何とも難しいです。

・・・ひらがな表記で子供だぁ！（作者逃走）

あと愛称に関しても、何故そう呼ばれるようになったか詳しく分からないので

こうかなぁと思った！（作者再び逃走）

後半に続く？いや、続けよ俺！

・・・早めに投稿できるといいですね（遠い目）

初ともだち！ 後編（前書き）

前半からの続きとなります。

汗を掻いたら風呂サウナだ！

と思いきやニパ（四歳）圧倒的なテンションに振り回されるオリ主を
ご覧ください。

初ともだち！ 後編

ボール遊びが終焉を迎える。

最初は軽く転がしたりゆつくりと投げたりだったのだが、だんだんとオーバー過ぎる動き、やたらジャンプしたり伏せてみたりと少なくとも四歳児を含んだ遊戯には必要ないであろう動きを大人が始め、俺とニパがその動きに何とかついていくのが大変だった。

大人がマジになってどうするのか。

ニパはボールを追いかけるのが楽しいのか終わるまでずっと走りまわって
いたけど。

にっぱりと素敵な笑顔で。

楽しかったんですね分かります。

俺も一人でじっとしているわけにもいかなかったので、ニパほどではないが結構走りまわった。

おかげで結構汗をかいたようだし、服も汚れた。

子ども（四歳）と大人では身長に絶対の差があるので主に大人の足を走り回ることになり、砂埃が舞い上がったなら全身が汚れる。

・・・楽しかったけどね。

汚れたと少し汗をかいたというのもあり、夕飯前にサウナでさっぱりしようということになった。

確かに汗は流したかったので異議は無い。

父さん達がサウナの準備を整え俺とニパも準備をする。

一年中サウナの際に使用できるように収穫して保存しておいたシラカンバの小枝、
ヴァスタを人数分取ってきたりだ。

しかし、それ以上は子供に出る幕は無い。

保管場所からヴァスタを出すのも母さんが出してくれたのを受け取って運んだぐらいだ。

・・・分かつてはいるものの、早く大きくなりたいなあ。
お世話になっている親に手伝いがちゃんとしたいし。

そしてニパ君？。

確かに枝を運び終わったらほぼ待機状態ですがね、私達。

まだサウナの準備は終わってないと思うのですよ。

サウナストーンもまだ熱してないでしょうに。

だからね、・・・脱ぐなあ　　！

もうすっぽんぽんですかい！

気が早いにも程がある！

そして目のやり場にちと困る！

だが俺の前にある光景は俺が二十五の男の時にお目にかかることな
どまず叶わないであろう。

美少女の裸、しかも外国人の。

・・・
・・・
・・・

「ウオ　　」！

思わず歓喜の声が出てしまった。

この状況に興奮しているのだろうと問われればYESと言わざるを得ない。

しかし、俺は変態か、変態なのか、違うならば静まれと問う別の俺が存在するのモまた事実！

それに、自分の裸を確認したことは先にあるが、やはり他人のそれ

を見るのでは全く違う！

自己愛、ナルシスト的な要素が俺にあれば自分の身体にうっとりすることもあったかもしれないが生憎俺にその気は無い。

・・・これはやむを得ない事態だ！

俺は今、四歳の女子であり、同年代の女子であるニパが眼前で肌を晒そうとも傍から見れば子供たちが一緒にお着替えだと思う！

いや、それは間違いなく！

ぶつぶつと自分に言い聞かせる俺。

すると不意に、

「いつるもぬいでー！」

俺のスカートが捲られた。

「ウエオ ！？」

思考に気を取られていた俺は不意の一撃に奇声をあげてしまう。

「うわっ！なななっ！何すんだー！」

抗議の声をあげているこの瞬間にもスカートが引っ張られている。

一緒に脱げということらしいがやめなさい！

というか力強いなオイ！

「ちょっと待てっ！」

ちよつと強めの口調で言うとニパの動きが止まり、きよとんとした表情でこつちを見ている。

「いいかニパ？

どんなことにも順番があるんだ。

まだサウナの準備が出来ていないのに服を脱ぐ必要はまだ無いんだぞ？」

そして他人の服を脱がせる必要はもつとありません。

するとニパはスカートを掴む手を放してくれた。

「ふう、分かってくれたならいいんだあっ！？」

ニパはしゃがみこむと離れたその手をスカートに突っ込み、人のパンツを強引に下げた。

「何してるんだあーっ！」

先生の話聞いていましたか君イツ！？

「じゅんばんちがってたんだね

「ごめんね、いつる」

確かに順番が違つという発言への理解は正しいですがそれはサウナに至るまでの順序であつて服を脱がす順番では無い！

「待て待て待て違っ・・・てうわぁっ!!！」

足元に下がったパンツをニパが引っ張ったおかげでバランスを崩した俺は後ろに倒れてしまう。

そこに覆いかぶさるようにニパが上に乗っかってきて服を脱がせ始めた。

「いつるもぬぎぬぎ　　！」

「っ・・・きゃああああっ!!！」

俺は暴漢に襲われる女のように叫んでしまった。

助けてP o l i i s i (ポリィシ〓おまわりさん)!!

痴女ならぬ痴幼女がいますよー!

レアですよー!!!

とつか誰か助けてええええ!!

俺は・・・俺は・・・脱がされるより・・・脱がす方が好きなんです
!!

ニパって子供のころはこんなにアクティブだったのか・・・?

アニメや書籍だとむしろいじられる側だと思っていたのだが。

まあ大人の時クールでも子供頃はやんちゃだったというのは良くあることだし。

だがこの日この時は俺は決して忘れまい。

今は耐えるのだ・・・子供のやることだからと言い聞かせて!!

ニパよ、大きくなったら存分にお返ししてやんよ・・・。

もしいるならば、エルマさん、もといエル姉が地獄に落ちる宣言をするぐらい濃厚なお返しをなっ・・・!

「えーい！」

俺は靴と靴下を取り上げられながら、そう決意を固めた。

まずは下半身から裸にする気が、エツチな子だよ全く!

父さん達がサウナの準備を終えて俺達を呼びに来てくれた時、ニパも俺も

素っ裸だった。

いくら制止しようとしても止まらず、もはや抵抗は無意味、このころからニパは一度決めたら譲らない性格だったようだ。

暑い……

サウナは暑いものですが、正確には暑苦しいというべきでしょうか。なんとか入れるとはいえ大人四人に子供二人が詰まっています。

子供二名はそれぞれお父さんの膝の上に乗っかっています。

サウナストーンに水をかけて蒸気を出し、ヴァスタで体を叩き皮膚を刺激しつつ汗を掻きます。

乾燥した枝は痛いんじゃないかと思っていたが、ちゃんと水に浸してふにゃつとさせてから使った。

これがなかなか悪くない。

父さんが子供に適した力で叩いてくれます。

「気持ちいいかいエイラ？」

「うん」

あ~~~~なかなか効くわこれ……。

……おっと俺すごいおっさんくさくなっている。

声に出してあ~~~~と言つところだった。

「きもちいいーかいいいらー？」

・・・ニパ君、一緒に叩いてくれるのはいいですが顔はやめなさい、顔は。

痛って。

痛って痛って。

「そろそろいきますか？」

「そうですねいきましょう」

何処に行くのか大人たちが立ち上がる。

それで俺も抱っこされて外へ。

お姫様だっこだけだね。

これでシャワーで汗を流してご飯かなと思っていたが、皆は家とは反対方向に向かっていく。

そっちには棧橋と湖。

しまった、アレだ！

火照った体をクールダウンさせる為に湖に飛び込むのだ！

そうこうしているうちに棧橋に到着。

「と、父さん」

まだ心の準備が出来てないんだと俺は訴えようとしたが、

「大丈夫だよ！

お父さんがついてるからね！」

その根拠不明の自信はなんですかって・・・うわっ！

広めの棧橋なので隣にはニパとニパのお父さんが横に並んだかと思ったら突然走りだした。

よーいドンぐらい言って欲しい。

静かな湖面がどんどん近付いてくる。

隣を見ればニパは父親の頭に肩車状態でつかまり、ロボットでも操縦するかのよう、

「いけー！」

とか言っている。

俺は行きたくないんだが！

「う、うわあああああっ！！！」

助けてサウナの妖精トントオーツ！！

可愛い子供がピンチですぞおおおお！！

棧橋の先端からスタンディングテイクオフ。

湖の端に二つの波紋が広がった。

その後さらに三ラウンド程サウナ 湖をやったせいかな。

もはや俺は体力の限界を迎えていた。

ウチでカタヤイネン一家を交えて夕飯も食べたはずなのだが記憶が不明瞭で、何かを口に入れて咀嚼していたようないような気がした。

今日は色々あって叫び過ぎたというのもあるかもしれない。

大人はともかくニパも何故かピンピンしてる。

解せぬ。

これが意識不明の時のブランクなのか・・・。

夕飯後のデザート食べつつの歓談もぼんやり気味で、リビングに移動して大人たちが今度ピクニックに行こうと話しているのは聞こえた。

・・・眠い。

すごく眠いけどちゃんと着替えて寝なければと何とか意識を保とうとしていたら顔の横に頭が現れた。

ちら見すればニパが俺にもたれかかりながら、スヤスヤと寝息を立てている。

さっきの元気はどこ行ったチミ。

「・・・いつる・・・すきー・・・」

そしてこの寝言である。

はっはっは可愛いじゃないか。

一つ一つの発言や行動、ちゃんと覚えておくからな。

将来話のネタに使ってやるよ。

でもそれは昔からの付き合いじゃないと話せない話題だし、引き出しは多い方がいいから、たくさん遊んでたくさん思い出作ろうな。

ニパの手を握りながら俺も目を閉じる。

今日はこのまま寝ることを許してくれ父さん母さん。

まあ大丈夫だろう。

意識を失う寸前に

「カメラカメラ！」

「大声出さないで！起きてしまっわ！」

「私の娘はかわいいなあ！」

「ウチの子もかわいい！」

とか聞こえたから。

だがさっきの話題に上ったピクニックが、まさかあんな事になるとはこの時はまだ知る由も無かった。

初ともだち！ 後編（後書き）

終えて一言。

前後にする必要はあっただろうか・・・？（離脱）

子供を相手に手を上げるわけにもいかず振り回される感じというのは表現が

難しいです。

さて、次はいよいよオリ主が力を発揮させます。

させるんですが、ウィッチ、魔法の力はまだともかく、この先に控えている

軍という立場をどうするか悩みのところですよ。

撃墜数、エース、勲章、銃火器、階級・・・敵はどうするか。

ストライカーは出ない予定です。

ストライカーだとズボンの登場が必要になり、世界観が

パンツじゃないから恥ずかしくないもんでウィッチ以外の子もズボ

ン丸見え状態に

なってしまう。

ネギま要素のパンツ見えがズボン見えになり恥ずかしいという観念が消えてしまいそうだからです。

・・・こんな感じですがまだ大目に見て下さる方は次回を白目でお待ちください。（爆）

この力は誰の為に - 前編 (前書き)

お隣さんでこれから長い付き合いになるであろうニパとの出会いを
果たしたエイラ (オリ主)

出かける前日、オリ主は自分の力を考えてみる。

その場は気にせずにごししようとしたが、到着した採掘場では
平穏とは程遠い展開が待ち受けていた。

この力は誰の為に - 前編

こちら季節は夏。

フィンランドは冬場は雪と寒さで鬼畜ですが夏は過ごしやすいようです。

日本のようにべたつくというか纏わりつくような湿気の暑さが無く、気温は30度まで上がることがあっても元日本人としては全く苦にならないので、これで暑い暑いという人は湖に叩きこんで差し上げようと思います。

存分に冷めるがいいでしょう。

それはさておき本日は楽しいピクニック。

うちとカタヤインンさん家とでお出かけです。

アウロラ姉さんは母さんの話だと寮のある学校に行っているようで不参加。

何とも残念。

写真でしか見ていないけど、将来別嬪になると思う。

流石俺の姉ですと言いたいくらいに。

遠足の類では前の日に楽しみや興奮で眠れないという話があります。が、どうやら俺もその分類のようです。

行く先にどんな光景があるかとか気になってなかなか寝付けませんでした。

でも楽しみだけで寝付けなかったわけではなく、実はお母さんからある物を貰ったことも関係しています。

それはタロットカード。

前に家の探検の時に戸棚の中にあるのを見つけてしげしげと眺めていたら、母さんがくれたのです。

何でも母さんが若いころに占いブームがあっただけで、その延長で買ってしまった物のブームが過ぎて置き場所に困り、長年戸棚の肥しになっていたそうです。

しまいっぱなしにするよりは、欲しい、使う人にあげようということのでめでたくもらえました。

他にも水晶玉とかも欲しいならと言われましたが、とりあえずはタロットカードで十分だったので他はまだいいやということにしました。

なんか髑髏（作り物・・・だよ）とかもあつたし。

・・・黒ミサとか混ぜってないだろうか・・・。

ベッド（父さん母さんが一緒に寝たがりましたが丁重にお断りして子供部屋の）に寝そべりながらカードの絵を見ていく。

愚者、魔術師、女教皇、女帝、皇帝、法王、恋人、戦車、力、隠者、運命の輪、正義、吊るされた男、死神、節制、悪魔、塔、星、月、太陽、審判、世界。

これら大アルカナ二十二枚。

そして棒、金貨、剣、聖杯の図の入った五十六枚の小アルカナカード。

あの光は俺に予知とタロットカードを使った魔法の力を与えたというが、予知は発現するような様子は無し。

ストライクウィッチーズ原作では使い魔を展開して予知の固有魔法を使っていたが、自分に使い魔が入っているとはどうにも思えない。耳や尻尾が生えた姿をイメージしてふんばってみるが何も変わらず。

タロットカードも手に入れたがだから何だと言うのか何も起こらず。カードを持って頭の中で発動！起動！サモン！展開！とか念じたりしてみたがうんともすんとも。

魔力の籠ったタロットとか、ネギま世界だしそんなアーティファクト的な物があるかもしれない。

予知も後々身につけたり覚醒したりするんだろうか。

まだ黒狐と契約してないという可能性もあるのだろうか。

するとあの光が俺に力を与えたというのは一体？

力が備わっているのならすぐに使えてもいいような気がするが、まだ時期ではないとかの類だろうか？

力に目覚めるにしてもそれはいつだろうか。

しかし今頭を捻る必要は無い。

今のところ特殊能力を必要とする状況ではないのだ。

これからの生活をゆっくりやっていくことにしよう。

ふと時計を見れば良い子は寝ていなさいな時間。

カードをしまいベッドサイドのスタンドの明かりを消して横になる。

なっちはいいが・・・寝付けない。

考えないようにしているのに、どんなところにピクニック行くのかなーとかどんな目覚めるパワーな展開になるのかなーとか余計な事を次々と考えて一人で盛り上がってしまう。

ならばと羊を数えるありきたりな策を弄することに。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

数える羊が千匹目に突入して柵を飛び越えるのではなく突き破るに至り始め、ジングスカン鍋開始したるかと思っただとこでようやく眠れました。

そのせいか朝がどうにも眠いです。

朝の歯磨きも歯ブラシを喉の奥に突っ込んで盛大にむせました。

目は覚めたけどな！

車に乗り込み出発です。

カタヤインさんの車とウチの車とで二台で行くのですが、

「いつるといつしよがいいー！」

とニパが言うので、俺がカタヤインさんの方に乗り込むことになりました。

子供の世話も大人の役目ですから。

それにしても元気ですねニパ君。

いつも以上のはしゃぎっぷりです。

車がちょっと揺れるたびにきゃー、とか言って抱きついてきます。

でも三回に一回ぐらい頭突きになるのは如何なものかな。

はっはっは、イタイジヤナイカ！。

ぐえっ。

目的地を聞く限りはピクニックに適した緑豊かな丘らしい、近くにはもう掘られていない採掘場の跡もありちよつとしたプチ観光地的な場所のようだ。

車に揺られること一時間半程。

目的地に到着、ちよつどお昼頃なのでまずはランチにしようということになり、レジヤシート広げてお弁当を出します。

メニューはサンドイッチ、各種パン、ジャム、ハム、チーズ、ジャガイモ（茹で済）と言った感じなのだが・・・。

両家族が互いに用意してきてしまったので結構量がある。

そして大部分を占拠しているのはパンである。

欧米は米食ではなくパン食なのでそれは問題無いのだが。

重要なのは量の問題だ。

数にして五十弱。

て中にジャムを入れようとして一瞬パンから目を離してしまった。

「ほらエイラ、つぶしたジャガイモを挟んで食べると美味しいよ」

「!?!」

再びパンに視線をやれば、割口にはマッシュポテト（調理日・今朝）さんが溢れるぐらいに自己主張をしていた。

奇襲だ。

少数でもお腹を膨らませることもできる実力派、お芋様の奇襲である。

「ありがとうございます」

笑顔の父親の行為、無下には出来ない。

・・・エーリカ、もしこの場に君がいてくれたならば、大好きなお芋を沢山食べさせてあげられるのに・・・。

俺は覚悟を決め、敵、ジャガパン（ジャガイモパン・誕生日・今）にかぶりついた。

・・・おえつぶ。

昼食後に俺はシートの上に横たわって天を仰いでいた。

うん、一人で食べる必要は無かったんだ。

でも俺が食べきると父さんは第二のジャガパンを作ってくれて、母さんもサンドイッチを渡してくれるんだ。

好意でやってくれてることなんだ。

カタヤインンさん御夫妻も自家製ピクルスをくれました。

うん、美味しいですよ。

漬物系は好物ですので。

和洋区別無く。

だがしかし。

四歳の胃の限界は早かった。

これ以上は飲料でも入れたらリバーズ確定というまで食べて、お腹いっぱい宣言をしてダウンです。

横になりました、お行儀悪いですが許して下さい。

俺がダウンしている間にも食事は進んだが・・・あの量をまさか食べきるとは思わなかった。

大人四人でも多いと思っていたのに。

・・・細目に見えて大食漢なんだな、うちの母さん。

そして俺の横にはニパがいます。

俺がガツガツ食べるのを見て真似しようというのか同じようなペー
スで食べて、俺とほぼ同時にダウンしました。

「おなかいっぱいだねーいっるー」

「そうだね・・・」

俺は今苦悶の表情だと思う、笑顔にはなれない。

対してニパは相変わらず笑顔。

多分思うにニパは食べ過ぎて腹が苦しくて横になったわけではなく、
俺と一緒に動きをするのを面白がっているんだろう。

この頃の子供の楽しいポイントが分からねえ・・・。

俺も昔はこうだったのかなあ・・・。

ふと記憶を呼び覚まして幼いころに撮った写真のアルバムの状況を
思い出してみる。

思い出すは母を手に握りしめテーブルに上がってどや顔している俺
の姿。

確か五、六歳の頃だったか……。

……

うん、分からない。

何故あんな行動をしたのか、記憶にございません。

俺は考えるのをやめた。

あ、ゆすらないでニパちゃん。

出ちゃっ出ちゃっ、リバーズしっちゃっ。

オゲエツ。

(注・吐きませんでした、ギリギリ)

それから約四十分ぐらい横になってようやく腹がこなれてきた。

「いつるーみてほしいものがあるのー」

するとニパが袖を引っ張って向こうへ行こうと催促してくる。

「……じゃ駄目なのか？」

「うんー！」

駄目ですか、左様でございますか。

ならば仕方ない。

「お父さんお母さん、ニパと丘の向こうで遊んできてもいいかな？」

「ええ、いいわよ」

「あまり遠くに行っちゃ駄目だよ？」

親からの許可を得ます、どこかに出かけるときは必ず保護者に声をかけましょう。

何かあってから、子供たちがいないんですは騒ぎの元だし。

ニパのご両親も承諾してくれた。

これでよし、後は迷子になったり怪我をしないように（主にニパが）俺が気をつけていればよし。

「いつるいこー！」

はいはい行きますかねっ……て。

「それは？」

俺はニパが手にもつ黄色いバケツを見る。

中には子供用のシャベルが二つ。

「ひみつー！」

何を見せたいんだろう。

シャベルで何かやるといって穴でも掘るのか？

それとも砂遊びか何かの類だろうか。

まあ行ってみれば分かるだろう。

前にもここへ来たことがあるのかニパは俺の手をとって駆け出した。

「ひみつー！」

「ひみつ？」

ニパに連れられ着いたのは、どうやら車の中で聞いた採掘場の跡地らしい場所だった。

緑の平野のなかに現れたむき出しの灰色の大地、大きな岩があちこちに転がっていて中には人工的に切断された石屑も見える。

単なる砂利と石、岩が転がっている特に変哲もない場所。

ちよつとした坂を下りながら採掘場の底、地上からすれば深さ三メートル程に到着。

その時、

俺はふと辺りを見渡した。

何でもない、石と岩の灰色の空間。

「・・・？」

本当になんともなくなのだが、良く分からない何かを感じた。

「どうしたの？」

「あ、いやなんでもない。

ここが見せたかった場所なのか？」

「ここだけだねーこれのねーこれなのー！」

ニパがシャベルを取り出して地面を掘り返す。

「あれー？」

地面に何か埋まっているのだろうか、あちこち移動しては地面を掘っている。

掘っているというよりは小さな小石を除けているだけのような気がするが。

ニパの作業を見守りつつ俺は周囲をもう一度見渡してみる。

・・・

周囲には人はいないようだ。

動物も類もない。

丘とその中の採掘場、その中の俺とニパ。

二人だけのはずなのだが、何か妙な気がする。

この採掘場の中か・・・？

入ってきたときには気のせいか程度の感じだった筈。

それが今や何か口では説明しづらい嫌な感じ、この場に余り長くいてはいけないような不気味さを感じる。

「・・・ニパ、ちょっとこっちに来い」

「どっしたの？」

ここに居てはいけないと俺の中の何かが警告している。

ニパには申し訳ないがここは引き上げよう。

俺はニパの手をとり立つように促す。

「えーまだー」

「そう言わずにさ、向こうの林の方行ってみよう」

「でもー」

「いーからー行ってみよう……っ!？」

俺はこの瞬間を後悔した。

嫌な気配を感じた時点で中止して立ち去るべきだったのだ。

不気味な感じ、違和感の正体は視線。

それもべつたりと張り付くような気持ち悪さを感じさせる。

視線の主は俺とニパが採掘場付近に姿を見せた時からずっと見ていたのだ。

それが獣とかだったらどんなにマシだったろう。

せめて生き物だったらどんなに良かっただろう。

奴は採掘場の入口の坂道に逃がさないと言わんばかりに、

俺たちの前にその異形の姿を現した。

この力は誰の為に - 前編 (後書き)

はい。

また続き物ですね。

・・・ダツ (作者逃走、逃亡、大脱走)

この先に控えてるバトルシーン表現とか考えるだけで頭痛がしてきます。

難しいです (キリッ)

かなり変な展開になるかもしれませんが、どうかご容赦の程をさせていただきます。

この力は誰の為に - 中編（前書き）

楽しいピクニック。

エイラ（オリ主）は二家族で郊外へとやって来ていた。

楽しい昼食を終えた後、ニパに連れられやって来た採掘場の跡地。

異様な気配を感じたエイラはニパと共に脱出を図るが、

その前に存在しないはずのモノが現れた。

この力は誰の為に - 中編

「なんだ・・・これ・・・!」

我ながらなんと芸の無い感想だが、今はこうとしか言えなかった。

何と表現すればいいか分からないのだ。

採石場を離れようとした俺とニパの前に現れた者。

いや、「物」か。

それは石だった。

石ならばそこら辺に転がっているが、その石は普通ではなかった。

何故ならその石は。

宙を浮いているからだ。

ゆらゆらと上下しながら、サッカーボールぐらいだろうか、そのサイズの石が目の前に浮いている。

「いつる、あれ、なに・・・?」

どちらかと言えば俺が聞きたい。

だが俺の体が警告している。

腹の底のから、「コレは危険だ」と。

「分からないけど・・・近寄るのはやめた方がいい、絶対に・・・！
それと、後ろに来て」

俺の背中にニパが隠れる。

ニパは震えていた。

当たり前だ、こんな訳のわからない奴を初めて目の前にして恐れる
なというのが
無理だ。

俺もニパの盾になるように前に立ったが、正直この場からはすぐに
走り去りたい。

だけど、ニパを置き去りにするような真似だけは死んでもしたく無
い。

恐怖と同時に、それはしてはならないという何かを、理屈ではなく
俺の中で強くそう感じた。

しかし、そんな俺の気持ちを打ち砕くような現実が待ち構えていた。
ぐるりと反転し、今まで背だった位置が俺達の方を向く。

そこには真っ赤に輝く歪な六角が奴の目玉のように存在した。

そして、

「!!!!!!!!!!」

「なにっ!?!」

まるで金属やガラスが擦れ合うように響く不快な音を石が発した。俺はその音、いや、声に聞き覚えがあった。

突如何処からか現れ、巨大な巣を作り、圧倒的な破壊力で全てを破壊する。

あの黒い異形の化け物。

「まさか……」

「まさか……そんなっ!?!」

人類の敵、「ネウロイ」の声だ。

まともな生き物から発せられる物ではない心底ゾツとするような声。

冷たく、しかし鋭く、悲鳴のようにも思える。

アニメで知って聞く物とは比べ物にならない。

現実として相対するところまで怖気が走るとは。

声だけでこっちの意識が消し飛ばされそうだ。

そんな俺の中で恐怖と同時に疑問が浮かぶ。

あいつ、光はネウロイはいないと言っていた。

嘘ではない筈、ならば目の前にいるこいつは!?

「はっ!」

こいつの正体に思考を巡らせようとした瞬間、奴が俺達の方へと突っ込んできた。

「伏せろっ!」

俺は反射的にニパを押し倒すようにして倒れる。

頭上を通過した奴は勢いそのまま奥の岩にぶち当たり地面に岩の破片を散らしながら落ちた。

結果として坂道から奴、障害が退いたことになる。

(道が空いた!)

奴が立ち塞がるようにしていた坂への道が開けている。

(考えてる暇は無い・・・)

ならば。

(このまま脱出するしかない!)

「いっつる!」

「大丈夫かニパ？立てるか？」

「よこ！まだいる！」

横！？

別の奴……

「があっ！！」

ニパを立ち上がらせようと俺の肩に何か当たった強い衝撃が走った。

「っあっ！」

「いつる！」

まともな受け身も出来ないまま地面に転がった。

「う……くうっ……」

余り衝撃に目眩がする。

痛みが無いのは麻痺したのか、体全体の感覚も変だ。

ぶるぶると震えが止まらない。

(ウ……あ……！……あア？……)

打たれた腕を動かそうとしても動く様子がない。

折れてしまったのだろうか。

脳も揺さぶられてショックを受けているのからいくら意識しても命令が身体に伝わらないのか、それすらも分からない。

(・・・まずい、転がっ・・・てる場合じゃ・・・ないのに！)

思考することがなんとか出来るが、出来たところで身体がどうにもならないのでは意味がない。

(う、ごげ・・・動け・・・)

震える体に命じる。

(起き口・・・起きるん・・・だ・・・!!
しっかりしろ!!)

身体の震えが収まりはじめ、体への命令が復活し始めた。

指が意思どおりに動く。

次に手が。

次に腕が。

機能を回復し始める。

あと少しで動ける。

だが、せっかく弱らせた獲物が動き出して逃げるのを待つ狩人はいない。

「！」

転がった俺の目に体勢を立て直した最初の奴がつつこんできた。

(今来られてあの体当たりを喰らったらず……！)

上半身を起こしたところに奴はまっすぐ突っ込んでくる。

まともな状態でも受けるのは避けねばならない攻撃を、防御も回避もロクに取れないこの体勢で受ければ。

ダメージが残るこの体でもう一度受けたら。

待ち受けるのは、

(死ぬ……！)

そう思った俺の前に、ニパが立ち塞がった。

「あっちいけ！いつるにさわるなー！！」

スコップを振り回して威嚇する。

だが奴はそれを全く気にすることもなく突っ込んでくる。

「……よせ！ニパ！逃げろ！今すぐ逃げろ……！！」

赤に染まっているのを。

「うわああああああああああああああああああ
……！」

自分ですらどこからどうやって出しているのかすら分からない声。

だが、そんなことを考えることはない。

とにかくニパを助けなければ。

俺の頭の中にはそれしかなかった。

地を蹴って走り出す。

手を伸ばす。

自分の負傷など気にならない。

それよりもニパを。

そこに最初にぶつかった奴が、もう一度ニパの方へ向き直る。

さらに別の一匹がニパに体当たりをしようとする。

動く獲物よりもまずは弱っている獲物、もう動かないように止めをさそうというのか。

「やめ、・・・やめろ・・・」

狙うなら俺を。

俺を狙え。

「やめろおおおおおつ

!!!!!!」

瞬間、意識が飛んだ。

まるで体を置き去りにして意識だけが急速に空に飛び出し、急速に落ちていくような感覚の後、周りの風景が色が消えたように灰色の世界になり、時間が止まったような静寂に包まれる。

「・・・!?!」

倒れた二バ、宙に浮かぶ奴ら、いずれも微動だにしない。

音も聞こえない。

光と合った空間に近かったが、今度は俺という個は確かにその場に存在していた。

俺以外が停止を？

これは一体……。

「よう、生きてるようで良かったよエイラ」

混乱する俺の背後から声が聞こえる。

名前を呼ぶ声に反射的に振りかえった俺の前に現れたのは、

「やっと会えたな」

一匹の黒い毛並みの狐だった。

この力は誰の為に・中編（後書き）

キヒィイ（奇声）

無理や・・・前、後編で纏めるなんてワテには無理やったんや（泣きごと）

・・・うふふ、ゲロ吐きそうDEATH（弱音）

・・・さて、中編です。

ヤッパセントウハムズカシィィィ！！（訳・やっぱり戦闘描写は難しいですね）

迫力あるバトルを書ける方を尊敬します。

え、まだバトルしてないじゃないかって？

・・・意識を後編にぶっ飛ばしてます。

さて、ピンチのエイラ（オリ主）です。

（注）ニパは気を失っています。

デコの傷は血は派手ですが。

キヒヒヒヒヒヒヤハッタアアアアアア
黒い狐は一体何者か？

あとネウロイっぽいものの外見はマルチナ曹長と一緒に映ってるネウロイを模した

サッカーボールをゴツゴツさせたようなもんだと思って下さい。

作者の精神は後編を書き上げられるかは永遠の謎（遠い目）

な、感じます。

・・・まだ許されるなら次もリラックスしてお待ちいただければと思います。

では、ありがとうございました！。

この力は誰の為に - 後編 (前書き)

危機の前に突如現れた謎の獣！

敵か味方か！

なおも襲い来る正体不明の敵にエイラの力が炸裂する！

この力は誰の為に - 後編

・・・？

俺の前には黒い毛並みの犬のような動物。

「犬・・・？」

「犬じゃないな

人間からすればイヌ科・・・とかいうカテゴリーに属してるらしいけどな」

犬じゃないなら一体・・・いや、ニパは！

石の塊に強打されるなど大の大人でも堪らないだろう。

子供ならなおさらだ。

今は喋る動物にかまってる場合じゃない！

「戻してくれ！ニパがつ！！」

俺は動物にあの場への帰還を望む。

この状態、灰色の空間になって現れたこの動物。

こいつがこの現象を引き起こしたと俺は考えた。

「待て！戻してくれと言われても俺にも戻せねえ！！」

「この現象はお前のじゃ・・・」

「ちげえって！むしろこつちが知りてえよ！」

違うのか・・・！？

ならどうすれば戻れるんだ！？

「今まで見てたんだが、どうにもお前が強く力を望んだのがオレとリンクを繋げたらしいな。

オレも猟師にやられて死んじまったんだが、あの光の奴に会ってな、使い魔として力を持たせて転生させるって言われたんだが・・・まさかこんなことになるなんて思わなかったぜ」

「見てたって・・・ニパが吹っ飛ばされるのも見ていて黙ってたのか！」

見ていてむざむざ黙っていたってのか。
俺は黒い動物に激昂する。

「こつちだつて黙っていたくて黙ってたんじゃねーって！

何回も呼び掛けたけどお前の方から反応が無かったんだよ！」

扉越しみたいなものか！？

片方から鍵を開けてくれと言われても片方が気付かなければ閉まっ
たまま。

「でもお前は俺の中にいて俺のことを知ってたのかもしれないけど

俺はお前が入ってるなんて知らなかったぞ！」

「アイツの説明がいちいち足りねーんだよ！」

全くだ。

すると俺と黒狐を包んでいた灰色の空間に亀裂が走りだす。

恐らくこの空間が維持されなくなったということか。

「うおっ!?!?・・・どうやらおしゃべりもここまでくさいぜ!

どうするよ!?!?」

「どうすると言われても・・・このままだとどうなるんだよ!」

「分からねえが・・・多分元の世界に戻る、だと思う」

どうこうするでもなく、自動でこの空間は終わるってことか。

あの状況下に戻る・・・事態の打開策はなんら浮かばねえってのに!

その間にもビシビシと空間に亀裂が入り、割れ出した場所からは色のついた世界が顔を覗かせている。

どうすれば・・・そうだ!

「お前は使い魔としての力があるんだろ?」

「らしいな・・・力を貸せってか?」

話が早くて助かる。

「いいぜ、このまま無視してお前ともう片方のヤツが目の前で石ころに潰される

気分の悪い光景なんぞ願ひ下げだしな！

それにお前が死んじまつたらお前の中の俺も死ぬような気がするからよお！」

「やるならトコトン手を全力で尽くす！」

同じ考えとは・・・いい感じだ！！

「ありがとうよ！よし行くぜ！」

「応！・・・で、どうやってだ？」

「お・・・」

さて、意気込んだはいいが問題発生。

問・どうすればいいでしょうか。

・・・

答・ノリで。

「・・・合体だ！俺の胸に飛び込んでこい！」

同調の仕方とか分かんないしな！

「単なる頭突きになるかもしれないが・・・他に思い浮かべる余裕はないか、

・・・行くぜ！」

そうして黒狐が俺に向かって走って飛びかかる。

そんな時に普通なら危ないというのを感じるかもしれないところを、

俺は確かな安心を感じていた。

何度も成功しているかのような安心感を。

黒狐が俺の中に入ってきた。

思わずその感触に目を瞑る。

一瞬の熱に体が包まれたようなあと、全身をやわらかな毛で撫でられたような感覚。

くすぐつたいような、それでいてとても心地良い。

直後、灰色の世界は崩壊した。

・・・！

石の塊は見つめている。

弱った獲物に止めをさすのも忘れ、動きを止め、見つめていた。

もし目がついていれば、それは驚愕に見開かれていただろう。

今の今まで地に伏していた相手が立ちあがったのだ。

力強く、地に足をつけて。

堂々と、胸を張り。

溢れんばかりに、魔力に満ちて。

「……やった？」

「……どうやらやったようだな

俺は今お前と一つになってるぜ

お前をすげえ感じるよ」

なんだろう、エロい表現だな！

だが……これならやれるような気がする！

「！」

俺めがけて石が突っ込んでくるのが見えた。

「うおっ！」

伏せた俺の真上を石が通過した。

（今は直撃かと思ったが・・・？）

確かに俺の目は目の前に迫った奴を見て反射的に伏せたが、間に合うタイミングでは無かった。

ならこれは。

「どうやら話に聞いてた能力って奴だな」

未来予知

近く起こる事象を「見る」ことができる。

今は俺に石の奴が突っ込む先のビジョンを見て、俺が対策として回避行動をとった結果、攻撃が当たらない結果になったってことか。

俺の意思とは関係なく発動するってのも。

この力、馴染むまで大変そうだぜ！

一段落、俺は二パに駆け寄り、ケガの様子を見る。

額から出血していたが、ひどい傷というわけではない。

反射的に手で体を守った形跡もある。

手の平の切り傷が数か所見受けられた。

おそらく押しのけられるように飛ばされ、その時にとがった部分で額を切られたんだろう。

「治療できるのか？」

「分からんよ、だが、なんとなくこうして見るといい気がする」

俺は二パの額に手を当てて、自分の力を二パに注ぐイメージを頭に描いた。

光が掌から溢れる。

血を出しすぎたのか青かった二パの顔に赤みが戻り始めた。

いい感じだ、治療も出来たのかこの力。

「よし、危険域は過ぎたかな、このままもうすこし……っとエイラ！」

途端俺に真横から突っ込んでくるもう一匹のビジョン。

くそ！邪魔しやがる！

その場から飛びのいて緊急回避！

「うまいもんだな！だが分かってるだろう！？」

「ああ、確かにな！」

攻撃だ。

避けてばかりじゃ奴らは倒せない。

とは言っても、銃や剣もない。

そんな俺の目に入ったのは、ニパの持っていたシャベル。

ぶつかった拍子に飛ばされていたやつだ。

「借りるぜニパ！」

シャベルを掴み、再び飛んで来た一度目の奴を横にすり抜けざまに突き立てる。

ガリリツといくらか削れる手ごたえがあったが、ダメージになっ
ているようには見えない。

「当たるがパワー不足だな！」

「そうだな！」

威力が足りない！

すると奴らは一か所に集まり始める。

「チツ、一匹一匹の攻撃じゃ当たらないからまとめてかかって来る
気らしいな

避けられるか？」

「体勢を整えときゃなんとかなるかな・・・」

だが、第一波を避けて続く第二波、第三波と果たして避けられるか。

避けて体勢が悪い所に来られたら避ける自信は無い。

「何か持っていないか？爆弾とか」

「持ってたら使ってるなあ、とつくに」

「だよな」

とは言ってみたものの、念のため腹部のポケットに手を突っ込んで
みる。

何かが指に当たる。

引っ張りだしてみるとそれは、

「おいおい、あるなら言えよ！」

「朝に着ていく服をと荷物の準備をベッドの上でやったからハンカ
チとかと

混ぜたってみたいだ」

俺の手に一枚のタロットカードがあった。

「これ一枚か」

「他は無いな」

けれど、この一枚からすさまじい何かを感じる。

一気にこの状況を好転させてくれそうな何かがある。

タロットの魔法。

どんな物が、見せてもらう！

そして奴らに、見せてやる！

俺は集まってこっちに飛びかかろうとしている奴らに向き直る。

「・・・子供二人相手なら余裕だと思ってたんだろっが」

散々やってくれた礼をしなければならぬ。

「お前らは調子に乗った！

調子に乗りすぎたんだ！！

驕れる奴には罰が与えられる！

だが天が出るまでもない！

俺が相応の罰をくれてやる！」

その絵柄を石ころ共に突き出す。

突き出されたカードからバチバチと火花が散りだした。

そしてあらん限りの力を込めて叫んだ。

「くれてやる罰はこれだっ!!」

「ぶちかませエイラ！」

描かれた絵柄は塔に降り注ぐ雷。

これからの災厄を暗示する、突然の災い。

「タワアアアアアアアッ

!!」

ツ!!

真っ暗な中を

「・・・イラ！」

・・・

誰かが呼んでいる。

「エ……ラ……けて！」

………？

誰だろう、聞き覚えがあるような……。

「エイラ！目を覚まして！」

！

混濁していた意識が一気に覚醒し、開けた目に光が飛び込んでくる。

一瞬の眩しさの後に映ったのは父さんと母さんの姿。

「エイラ！……ああ良かった！」

二人に抱き締められる。

あ、これ初めて目を覚ました時に似てるなと思った。

「………ニパっ！！！」

首を回しニパの姿を探す。

「いつるー！！」

！………無事だったか！

カタヤイネンご夫妻も到着していたようだ。

二人のところから走り寄ってきた二パに抱き締められる。

「大丈夫か？怪我はないか？」

「うん！」

いっるがこわいのやつつけてくれたから！

だからだいじょうぶ！」

お元気でいてくれて俺は嬉しいです。

あ、そういえばあいつらは全部片付いたのかな。

夢中で「塔」を発動させてみたけど・・・って。

俺は目を疑った。

周囲を見渡すと岩という岩が砕け散り、あいつらがいた場所はクレ
ーターができて

真黒に焦げている場所がちらほらと。

どうやら奴らは残らず破壊されたようだ。

密集なんぞするからだ。

採掘場跡地はめっちゃめっちゃに破壊され、跡地の跡地にクラスチェン
ジしていた。

そこを警察、消防、救急、あと銃を持つ明らかに軍隊な方々が何か
調べている。

器具でクレーターのところを測定しているようだ。

改めて見渡すとピクニックに来た時よりも明らかに人の数が増えていた。

普通では見慣れない方々が。

・・・いかん。

大騒ぎになったようだ。

ここまでの破壊力になるとは俺もびっくりです。

どうしよう。

「いつる」

悩む俺にニパが声を掛けてくる。

「いつるがこわいのやっつけてくれたから、これみつかったの！」

そう言っつて俺に紫色の小さな欠片をくれた。

宝石にそこまで詳しくは無いが有名どころは分かる。

間違っつてたらすまぬ。

多分合っつてるはず。

「アメジスト?・・・これを探す為にここに?」

「うん！これをいつるにもあげたかったの！」

そうかー。

前に一回来てた時に何の跡地が分かってたから俺にくれる為に探しに行ったと。

女の子からプレゼント貰えるなんて幸せだな。

ちょっとその為にここに来てキツツイ目にあっただけだなー。

男の時じゃ永遠に無理だったよ！永遠に！

「ありがとな・・・それと」

ちよい寝ます、ぐう。

寝たふりですが。

「いつる？」

「エイラ！どうしたの？」

「ど、何処かまだケガを！？」

救急車、救急車　　！」

ばたばたと人が走りよって来るのが聞こえる。

ゴメン。

今は少し寝かせてほしい。

能力が目覚めたり黒狐と合体！して岩石軍団とっちめたりとハードな日だったので、夜ではないですが……もう寝ます。

そんな俺に念話で話し掛けてくるのが一名いた。

(よう、まだ寝るなエイラ)

(寝かせておくれよムスタ)

(ムスタ?)

(「黒」狐だろ?)

だから黒でムスタ、……カッコイイだろ?)

(安直だなオイ、まあそれでもいいけどよ)

(で、何か用か?眠いんだが)

(寝かせてやるよ、オレも疲れて眠いしな。だが、その前に言っておきたい事がある)

(何だい?……ああ、そうだ俺も言いたいことがある)

(じゃ同時に言うか)

(おう)

3、2、1……せーのっ

((これからよろしくな))

(オレも大変だがお前も大変だ、まあいろいろ付き合っただけよ)

(力貸してほしい時は言う、そのかわり他は自由にさせていいからな)

(ああ、オレも協力以外の時は自由に言われずとも好きにするつもりだ)

(んじゃ、そゆことで)

(おう、オヤスミ)

...

(待った、一つ聞きたい)

(ん?)

(お前は獵師にやられたんだよな?)

前は黒狐とは何か別の狩獵対象の生き物だったのか?)

(いや、オレは前の時でも黒狐だぜ)

(希望したのか? 前のままでって)

(いや、特に何も言われてない。)

別にこの姿のままでも不自由は感じないし、

下手に別の生き物にされたら混乱しそうだったからな
オレは助かってる)

えー

(・・・俺は女にされたんですが)

(あー・・・そういう気分だったんじゃないの？

まあ・・・元男とかでもオレは気にしないから、強く生きる)

・・・そういう気分ってどないやねん！

チクショウ、あの気まぐれピカピカ野郎めが。

(ドンマイ、あとでまた色々話そうぜ、じゃ、オヤスミ)

もう少し慰めて欲しかったが、まあいいか。

(・・・ああ、オヤスミ)

・・・

・・・

・・・

そしてムスタが眠り、俺も目を閉じたのだ。

周りの喧騒は勢いで聞かないようにした。

多分、目が覚めたら忙しい事になりそうだから。

この力は誰の為に - 後編 (後書き)

・・・メリークリスマス (謝罪)

いやはや遅いにも程がありますね。

申し訳ございません！

年内には間に合わせた結果が雑になったことも重ねてお詫び申し上げます！

さて、エイラ (オリ主) が黒狐と合体しました。

使い魔がしゃべるといふのは原作でも無いので、ならばと調子に乗りました。

いらん子ですと穴拭智子さんの使い魔「コン平」は喋るようですが、使い魔の扱いがいまいち不明です。

エイラ (オリ主) の詳しい魔法設定、タロットについて、

ネウロイっぽい石ころ軍団の正体については次回で明らかにする (予定) です。

・・・しかし。

書いていこうとすればするほど、ネギまとストライクウィッチーズは難しいです。

魔法が一般人に公にされていない世界でどうやって活躍するか。

・・・アンケート (はあと)

1. やはり軍に入ろうぜ！組織に入れば多少のバレはもみ消しだ！

やっぱりズボン履いてストライカー装備して空飛ぼうぜ！ビバウィッチ！

2・あくまで力を秘密にしつつ奴らを倒す、必殺仕事人だ！

ちなみに1だとズボンパンツじゃないから恥ずかしくないつつてんだろ！

で通るとして、

ストライカーをどうするかが問題です。

原作ではレシプロ機が主体ですが、ネギま世界は最新型戦闘機も出て来ているような世界です。

・・・アンケート2！

1・パワー、速度ならジェットを使い。

精密動作や静止動作、細かい動きはレシプロと使い分けようぜ！

2・現代戦闘脚であらゆる局面を乗り切るぜ！

また現代機でやる場合、

501メンバーはそれぞれ何の戦闘機をストライカーにするか。難しいです。

こんな感じで悪戦苦闘しつつ、新年も続けられたらと思います。

それでは読んで下さった皆様。

他の小説書きの皆様。

よいお年を！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9935w/>

魔法先生ネギま！ - フィン人の国から -

2011年12月31日01時46分発行